

地方都市住民の河川・水辺意識

長崎大学工学部 正員 ○野口正人
鴻 池 組 阪口 治

1. まえがき

河川管理において治水事業が重要であることは言うまでもないが、地域住民の生活の質の向上とも関連して、河川環境整備の必要性が強く叫ばれるようになった。このようなことから、最近では、各種の親水施設や河川公園が造られ、「多自然型河川工法」が鋭意施工されるまでになってきた。

本論では長崎県の一河川を取り上げ、地域住民の河川・水辺意識を調査し、今後の河川環境整備を円滑に進めていく上での問題点について検討した。

2. 長与川とその環境

長与川は、長崎市北部に隣接した長与町(図-1)を流れる2級河川であり、大村湾湾奥部に注いでいる。長与町は元々はのどかな山村風景を呈していた小さな村であったが、高度経済成長時代に長崎市のベッドタウンとして開発が進み、昭和40年代以降は青葉台団地、長与ニュータウン、南陽台団地といった大型団地が続々と建設され、人口は急激に増加している。このようなことから、長与川はさほど大きな河川ではないが、地元小学校の校歌に歌われ、また、多くの民話が語り伝えられる等、長与町民の「母なる川」として住民の生活に大きな影響を及ぼしてきた。



図-1 長与町の位置

長与川の水質概況を示すために、BOD₅、TNの縦断方向の変化を図-2に表示した。長与町は下水道普及率がかなり高く、長与川は水質的に非常に悪い河川と言うわけではないが、下流域においては各種の排水の影響を受けていることが分かる。また、長与川の上流には長与ダムがあり、さらには山林・田畑からの流出水を受けて、TNに関しては上流で幾分高い値を示している。

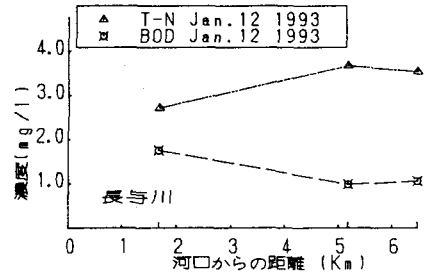


図-2 長与川の水質概況

3. アンケート調査と回答結果の概要

地域住民が河川並びに水辺に抱いている意識を調べるために、長与町住民を対象にしてアンケート調査を実施した。今回のアンケート調査では、任意に抽出された戸別に研究室の学生によりアンケート用紙を配布し、回答結果を郵送方式で回収した。アンケート用紙の配布総数：400部に対して243部の回答が寄せられ、回収率は60.8%であった。なお、本調査は平成4年12月に実施された。

アンケート用紙は4頁よりなり、趣旨説明の後、①回答者の属性、②長与川と住民との位置関係、③河川に接する目的、頻度、④「ふるさとの川モデル事業」の理解度、⑤「多自然型河川工法」の理解度、⑥郷土の川：長与川への親近感、⑦長与川の水への意識、⑧長与川の水辺への意識、⑨河川環境整備に関する行政機関への期待、⑩河川環境整備についての住民の自己努力、について質問がなされた。

紙面の都合で回答結果について詳しく説明することはできない。そのため、以下では、特徴的な事項について二、三述べるに止める。まず、④、⑤に関連した設問の回答結果からは、殆どの住民が「ふるさとの川モデル事業」や「多自然型河川工法」について耳にしたことがないことが明らかにされた(表1, 2)。ところで、地域住民が郷土の川である長与川に、どの程度の親近感を抱

表1. 「ふるさとの川モデル事業」の知識

	はい	いいえ
回答数	44	189
回答率(%)	18.9	81.1

回答総数：233

表2. 「多自然型河川工法」の知識

	はい	いいえ
回答数	29	209
回答率(%)	12.2	87.8

回答総数：238

いているかは、「水辺づくり」を進めていく上で重要な因子である。その様子の一部は、河川に接する目的、頻度の回答結果として表れているが、⑥の設問では、長与町に伝わる民話を通して住民がどの程度長与川に親しみを憶えているかを問うた。その結果、「長与の昔話ばつくる会」発行の書籍：「長与の昔話」を通して回答者の半数が長与の民話について知っていることが分かったが、直ちに「水神さま」への参拝といった具体的行動に結び付いている訳ではないことが示された（表3、4）。

設問⑦、⑧では、長与川の水、水辺が以前に比べて「きれいになった」か「きたなくなった」かを問うた。前者に対する住民の意識を、回答者の居住地毎に整理して示せば図-3 のようである。本図より明らかなように、「以前のようにきれい」と答えた回答者は皆無に近く、殆どの者が長与川が従来から現在まできれいであったとは思っていないことが分かる。しかし、嬉里郷、高田郷、吉無田郷といった町の中心部付近や長与川から離れて生活する回答者の多くは、「きれいになった」と答えており、長崎豪雨災害の災害復旧による河川改修や街路整備が住民に好印象を与えている。しかし、回答者が最も多い町中心部に位置する嬉里郷では、「きたなくなった」、

「以前のようにきたない」とした回答者が23人、また同数の回答者が「その他」としており、「以前のようにきれい」、「きれいになった」と答えた回答者：34人は絶対的多数という訳でもない。このような傾向は、他の地区の多くでも見られ、河川の本来在るべき姿に多様な意見が存在することを窺わせた。

4. 河川環境整備に係る今後の課題

今回のアンケートを実施して、まず第1番に強く印象に残ったことは、多くの回答者が「安全な河川」の実現を切望していることである。ここに、「安全性」としては、a. 治水上の安全性、b. 子供の水遊び場としての安全性、c. 飲み水としての安全性、が最も多く取り上げられた。同時に、「生き物との共存：豊かな生態系」に言及した回答も数多く見られた。これらのことは、すべての生き物に配慮した河川環境整備の必要性を示している。前節では多様な意見の存在を紹介したが、叙述式回答に見られた「海を眺めると心が安らぐので、河川に対しても、きれいで安全で、憩いの場所となれるようなものを期待しています。（今まで河川に対して、全く意識していなかったのですが、今回のアンケートにより意識が高まったように思います。）」の意見がその背景を如実に物語っているのではなかろうか。本来的な河川管理の重要性を住民に十分理解して貰うことが、結局のところ、快適な河川・水辺環境を達成していく近道に思えるが、それにしては「ふるさとの川モデル事業」や「多自然型河川工法」についての広報が不十分なのが気がかりである。「多自然型河川工法」そのものの開発・施工と共に、それらのことについても十分に留意する必要がある。

5. あとがき

長与川は県管理の河川であるが、現在、「多自然型河川工法」が試みられている。快適な河川ならびに水辺を実現していく上では多岐に亙る施策が必要となるが、これを契機として長与川が真に住民に愛される川となるよう、行政・住民が一体となった取り組みが望まれる。最後に、本研究を進めるにあたっては、長崎県長崎土木事務所より多大の支援を受けた。記して深甚の謝意を表します。また、アンケートに回答戴いた長与町民の皆様やアンケート調査の実施に協力戴いた当時の大学院生、卒研究生に深く感謝致します。

表3. 長与民話の知覚

	はい	いいえ
回答数	121	117
回答率(%)	50.8	49.2

回答総数：238

表4. 「水神さま」への参拝の有無

	はい	いいえ
回答数	37	201
回答率(%)	15.5	84.5

回答総数：238

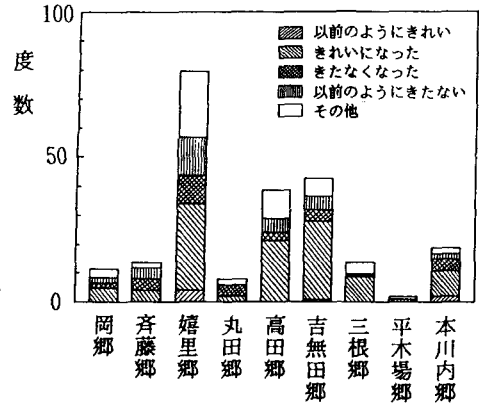


図-3 住民の水意識